

スペイン ELE 教育事情報告

--- 『ヨーロッパ共通参照枠』以後の ELE 教育教材について

外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻 江澤照美

1. はじめに

筆者は、平成 20 年度愛知県立大学学長特別教員研究費により、同年 5 月初旬より翌年 3 月初旬までの 10 ヶ月間、「スペインにおける「外国語としてのスペイン語教育」事情と展望についての研究・調査」を研究テーマとして、スペインにおける長期の在外研究を実施した。本研究の成果については、本学高等言語教育研究所主催の言語教育研究会(第 4 回、2009 年 8 月 11 日)や国内のスペイン語学を専門とする大学教員や大学院生の多くが毎年夏に参加する研究合宿(2009 年 8 月 27 日)、そして所属学会での大会(2009 年 10 月 11 日)など計三回の口頭発表による報告を行った。当然のことであるが、一連の口頭発表は、一部重複する箇所はあるものの、参加する会の趣旨の違いを考慮し、その内容はすべて異なっている。さらに、学内で実施された学長特別教員研究費採択者による研究成果報告会(2009 年 10 月 29 日)においても限られた時間の中でその概略について報告した。

しかしながら、筆者が在外研究で得た本当の成果とは、これまでに実施した口頭発表で要約しきれない性格のものではなく、むしろ今後様々なテーマについて筆者自身が文章化したり、発表したりするものの中に、あるいは授業その他の実践的活動の中にこそ表われうるものであると思っている。特に今回の研究テーマの対象であるスペイン国内の外国語教育は、21 世紀に入ってから大きな転換期を迎え現在もなお改革が進んでいるヨーロッパ全体の言語教育体制の中でその展望を見据える必要があり、今後も追求し続ける価値のある大きな研究テーマであると筆者は認識している。

今回の報告では、スペイン国内で出版されている ELE 教育教材、及び教材を出版している出版社に関わる状況を主として取り上げる。在外研究中の主要な滞在先は愛知県立大学と交流協定を結んでいるアリカンテ大学であったが、時折アリカンテ以外の場所で開催された ELE 教育関係の学会やワークショップに出席したり、ELE 教育やスペイン語学に関する講座を受講した。そのおかげで日本にいる時よりも、スペイン国内の ELE 教育教材の現物やカタログを入手して各社の教材を見比べたりその特徴等について考察したりする機会に恵まれた。『ヨーロッパ共通参照枠』以降の ELE 教育出版社の対応がカタログの内容にも十分反映されていることはすでに承知していたが、自社の ELE 教育教材を各教育機関及び教育関係者に売り込むべく PR する各社の姿勢は日本の ELE 教育に携わる者の一人である筆者の興味をひいた。特に日本でスペイン語のテキストを出版・販売するテキスト会社の対応とはいろいろな点で異なるところがあり、このような相異もスペインと日本の ELE 教育事情の違いの反映であるように思えたのである。以下にそのあらましと筆者の見解・考察を加え

る。

2. スペインの ELE 教育教材の出版事情

2.1. 『ヨーロッパ共通参照枠』以後の流れ

2001 年に欧州評議会が策定した『ヨーロッパ共通参照枠』(以後、スペイン語表記の頭文字をとって MCER と略記する)はヨーロッパ各国の言語教育に大きな影響を与えて現在に至っている。その全体像を理解するのは実のところ必ずしも容易ではないのだが、言語学習者のレベルを A1 から C2 までの 6 段階に分けるといふ共通参照レベルや各レベルの能力記述文など比較的理解しやすいと思われる部分については、2008 年時点でのスペインの ELE 教育関係者や学習者にほぼ認知されるに至っていると筆者には感ぜられた。

MCER のような、従来の外国語学習・教育の大幅な見直しを求める提案が受け入れられ普及に至るまでには相応の期間が必要である。MCER 以後しばらくしてスペインでは従来の ELE テキストの改訂版が出版されたり、MCER にレベル準拠した新しい ELE テキストが発刊されるという動きが始まった。MCER の中で検討課題として提示された各レベルや能力記述文を議論の出発点として、スペイン国内の言語教育関係者は従来の教育や学習の大幅な見直しに着手し始めたのである。MCER のレベル準拠を謳った新しい ELE テキストの出版数が増えるにつれ、MCER そのものも ELE 教育界に徐々に浸透してきたと言えよう。

そのような改革の動きの中で 2006 年にセルバンテス協会が “*Plan Curricular del Instituto Cervantes: Niveles de referencia para el español*” (『セルバンテス協会のカリキュラム・プラン スペイン語のための参照レベル』以下 PCIC と略記)を出版した。MCER は外国語学習や教育のための抽象的な枠組みであり、議論のための叩き台であるが、PCIC は MCER をスペイン語学習・教育のために具現化した参考指導要綱である。セルバンテス協会は MCER に準拠したスペイン語教育の指針を定めるべく、1994 年に定めた参考指導要綱の全面的な見直しを実施した。その成果が新・参考指導要綱と呼ぶに相応しい PCIC であり、スペインは MCER 策定からわずか 5 年後にスペイン語における参照レベルを打ち出し、ヨーロッパ諸国の中でも MCER への対応が進んだ国となったのである。

近年刊行されたスペインの ELE 教育教材は MCER 準拠がほぼ当然のことになっているが、2006 年の PCIC 出版後は MCER と PCIC の両方に準拠した ELE テキストの新刊や改訂版が徐々に増えて現在に至っている。

筆者がスペインに滞在した 2008 年当時の ELE 教育界においては、MCER は少なくともその概略程度ならば大抵の ELE 教育者や教職を目指す学生の知るところとなっていた。それに比べると、出版後まだ数年しか経っていない PCIC については、存在そのものは知っていてもその内容については国内で教鞭をとる現役の ELE 教師ですら必ずしも十分な知識を持っていなかったようで、MCER をテーマにした論文や研究発表が年々増えているのに対して、PCIC をとりあげた論文等は現在でもまだそれほど多くはない。ヨーロッパ評議会が推進する言語政策の産物である MCER がヨー

ロップの教育界全体に浸透するまでに年月を要しているように、PCICもスペイン国内のELE教育界に浸透するにはもう少し時間を必要としているようだ。しかし、セルバンテス協会自身が積極的にPR活動を行っていることもあり、PCICの国内、そして外国のELE教育界への普及もそれほど遠くない将来に実現すると思われる。

2.2. 出版社別にみるELE教育教材の特徴

本項では、スペイン国内でMCERやPCICの普及に大きな役割を果たしているELE教育教材の出版会社やその出版物についての概略を述べる。

スペインにはELE教育教材を開発・出版している会社が複数存在する。本報告で取り上げるのは国内の主要な出版社であり、外国のELE教育機関向けにも販売網を持っている。各社のカタログや実際の出版物などから近年のELE教育界の動向を読み取ることが今回の報告における筆者の狙いであり、全てのテキスト紹介をみれなく行うのが趣旨ではなく、また特定の会社や出版物のみを推薦する意図はないことを予めお断りしておく。

なお、ここで主に言及するのは、テキストや辞書、参考書、補助教材であり、ELE教育専門家による論文及び著作集などは原則として除外する。具体的な会社名としてはAnaya, Difusión, Edelsa, Edinumen, EnClave ELE, Santillana, SGEL, SM(アルファベット順)である。他にスペインの学会等で出展していた会社もあるが、カタログの内容や出版数などからスペインで主要なELE教科書出版会社と思われる、以上の各社が展開している教材出版物を中心に取り上げることにする。

2.2.1. Anaya

Anaya ELEがELE教育関係の出版部門である。総合的なELEテキストである*Vuela*はMCERに準拠している。また、*Sueña*(新版)は若年層以上向けでPCICにも準拠している。*Mañana*(新版)は*Sueña*よりさらに若い世代向けを謳っている。また、*Español Segunda Lengua*シリーズは近年国内で増加する一方の移民の子弟で中学生レベルのテキストである。文法・動詞・語彙に特化した自習用教材である*En gramática*シリーズはすべてPCICに準拠している。

その他、カタログによるとオーディオ教材や段階別読解教材、MCER以前からの教材も用意されている。アルカラ大学が作成した特定領域スペイン語シリーズである法律・ビジネス・医療分野スペイン語テキストの紹介もある。

ウェブページは <http://www.anayaele.com/> である。

2.2.2. Difusión

MCERに準拠しているテキストと各参照レベルの対応表をカタログに掲載し、利用者にとって便宜を図っている。16歳以上+成人、青少年(12~15歳)、子供(6~11歳)別のラインナップになっているが、総合テキストの*Aula Internacional*やラテンアメリカへの理解を深める*Aula Latina*、スペイン国内の学習者対象の*Aula*などのシリーズが揃っている16歳以上+成人向けのレベル別テキストが充実している。この図表を見ていると、MCERに準拠したテキストはどちらかと言えば子供より大人の世代向けの

教育にまず必要であることに気づく。

愛知県立大学でスペイン語を専攻する学生たちは同社の *Gente* シリーズを客員教員による会話の授業で使っている。このテキストはタスクアプローチを主たる教授法として採用し、仲間との共同作業を通じてコミュニケーション能力を養うことを目標としている。タスクアプローチは現在のスペインの ELE 教育で比較的良好に用いられる教授法であると在外研究中に筆者は耳にしたが、実際、ELE 教育関係のワークショップでも、筆者が見学させてもらったアリカンテ大学内の外国人向け ELE 教育の現場でも、グループで相談しながらある活動を行い、それを皆の前で発表するというスタイルがスペインの教育現場では好まれていた。

なお、同社は語学学校 *International House* との共同企画で ELE 教育関係のワークショップを主催し、筆者は在外研究中に 2 回それに参加したが、実践的な内容のワークショップには大いに刺激を得た上、語学学校内見学や ELE 教育関係者との交流の機会も設けられていて貴重な体験となった。このように、スペインの有力教材出版社は、ワークショップ主催や後述するネットでの情報提供などを通じて、ELE 教育者や ELE 教師を目指す人々が知識やアイデアを交換・吸収する機会を提供したり、情報を提供したりすることにより彼らにアドバイスし、リードしているように筆者の目には映った。

同社のウェブページは <http://www.difusion.com/> である。また、Español Online という有料のバーチャル語学学校も開講している。(<http://online.difusion.com/>)

2.2.3. Edelsa

この会社はセルバンテス協会が編纂した PCIC を出版した会社である。よって現在のところ、PCIC に準拠したテキストを最も多く出版しているがこれは当然のことであろう。PCIC に準拠した最初の総合テキストとしてカタログにも記されているのが *Pasaporte* シリーズである。*Pasaporte A1* テキストの各章と PCIC の対応については <http://www.brandnewroutes.com.br/site/pasaporte/> に詳しい。PCIC に準拠した ELE 教育テキストとはどのようなものであるかを知るには最も適していると考えられる。このテキストも成人向けである。

同様に PCIC に準拠した同社のテキストとしては、文法テキストとして *Competencia gramatical en Uso* シリーズが、若者向けのテキストとしては *Joven.es* シリーズ、補助教材として *Actúa* がある。*Competencia gramatical en Uso* については、筆者は今年度に非常勤先の大学でスペイン語専攻の 2 年生向け中級文法テキストとしてこのシリーズの B1 レベルのテキストを使用している。MCER の規準では日本のスペイン語学習者の語学力が必ずしも判断し難いのは承知しているが、学習時間から考えて、大学でスペイン語を専攻して二年目の学生は順調に語学力をつけていれば、概ね MCER の B1 か A1.2 レベルぐらいには到達しているとの見込みをつけ、B1 レベルのテキストを選択したのである。実際に教室でテキストを使用してみて、PCIC による B1 レベルを実感できたのは筆者にとって収穫であったものの、同時に日本でスペイン語を文法を学ぶ学生向けのテキストとしては内容が易しすぎるが多すぎるという感想を持った。日本のスペイン語専攻教育における文法教育はかなり詰め込み式であり、

それはそれで問題があると感じているが、MCER や PCIC に準拠したテキストを日本の ELE 教育の場で使用する際に考慮すべき点が大いにあるように思えた。他社のテキストで PCIC 準拠のものを使用して、比較検討する必要もあるだろう。

Nuevo Ven (新版) や集中講座向けの *Eco* はアントニオ・デ・ネブリーハ大学が推奨している。先に Anaya がアルカラ大学のテキストの宣伝をしていたように、ELE 教育に定評のある大学とテキスト出版社のコラボレーションが見られる。その他出版物は数多い。

ウェブページは http://www.edelsa.es/inicio_content.php である。同社も国際的なワークショップを開催しているようで、ELEテキスト出版社が国内のELE教育研究の格好の場を提供していることがよくわかる。

2.2.4. Edinumen

後述する SGEL 社と並んで、カタログ内容が充実している。出版物の種類ごとに MCER の参照レベル別分類がされた対応表が実にわかりやすい。出版物の種類とは、対象年齢別メソッド、特定領域スペイン語、DELE 対策、試験用教材、補助教材、段階別読解教材、文法解説本などで、出版物のラインナップがうまく整理されている。

アリカンテ大学付属の語学学校ではこの出版社の総合テキスト *Prisma* を使用していた。この *Prisma* シリーズは A1 から C1 まで揃っていて、C2 も刊行予定である。

ただし、C2 レベルの ELE テキストは現在ごく少数しか存在しないことが今回 8 社のカタログを比較参照して判明した。その少数の C2 刊行物も大半は MCER 以前の刊行物をその難易度から判断して C2 のリストに載せているにすぎず、MCER 以後他のレベルの新刊テキストは次々に発売されているのに、C2 レベルに準拠したテキストだけはその開発が現在のスペインの ELE 教育界では後回しにされているようである。

この会社の新刊で特筆すべきは日本人学習者を対象としたスペイン語総合教材で PCIC にも準拠している *¡Español ya! Método de español para japoneses* シリーズである。特定言語の母語話者向けのシリーズは近年他社からも徐々に出版されている。セルバンテス協会が旧版の参考指導要綱には存在しなかった異文化対応能力向上にかかわる数章を PCIC に加えたように、近年のスペインの ELE 教育界は異なる言語や文化を持つ ELE 学習者への対応を以前にも増して推進していることがわかる。

ウェブページは <http://www.edinumen.es/> である。新刊で 12~16 歳対象の *Club Prisma* はネットにアクセスして練習問題や小テストができるシステムを持っている。

2.2.5. EnClave ELE

カタログを見る限り、世界中に多くの販売網を持っているようだが、日本での知名度は高くないように思える。成人向け総合テキストとしては、*En acción* シリーズや *Así me gusta* シリーズがある。

総合教材はカタログを見る限り、他社に比べてややその存在感がないように思えるが、補助教材は MCER に対応したものを次々と発売していて見るべきものがある。例

えば、MCER のレベル別のアクティビティ用教材 *Actividades para el marco común europeo* のシリーズがある。2.2.4. でその少なさに言及した C2 レベルのテキストも刊行されている。また、*Práctica* シリーズや *En diálogo* シリーズのラインナップも、授業で使えるヒントが少なくないと思う。辞書類としては *Diccionario de enseñanza y aprendizaje de lenguas* は ELE 教育用語を知るのに筆者自身が重宝しているし、近刊の *Claves para comprender el marco común europeo* は未入手であるが、MCER への理解を深めうる文献であると思われる。

ウェブページは<http://www.enclave-ele.com/web/> である。

2.2.6. Santillana

サラマンカ大学との関わりを持つ出版社である。近刊の若年層＋成人向け総合テキストとしては MCER, PCIC に準拠した *Español Lengua Viva* シリーズがある。また、中学生の国内移民向けテキストである *Llave maestra* シリーズもある。

カタログには自社出版物と MCER の参照レベルの対応表が用意されているが、他社に比べると MCER 準拠のアピールは控えめな印象を受ける。

ウェブページは <http://www.santillanaele.com/> である。

2.2.7. SGEL

筆者が見たところ、カタログの見やすさ、教材の充実度において Edinumen とほぼ互角の印象を受けた。Edinumen が日本向けにまだ十分な広報活動を行っていないためにおそらく出版社としての知名度が(特に日本人 ELE 教師間で)高くないのに比べ、SGEL は日本に代理店を持っていたこともあり(注:2009 年末まで)、スペインの出版社としては知名度が高く、日本語版の教材カタログも毎年発行されている。

出版物の MCER 対応表も整備されている。テキストは A1 から C1 まで揃っている。バルセロナ大学との共同出版として *Destino Erasmus* シリーズが新刊発売予定であり、MCER 以後のヨーロッパ各国の外国語学習者を対象に推進される、異文化理解能力向上を伴う言語教育の実例を知るための資料としても利用できそうである。

出版物の数も多いので、これまでの他社の項目でとりあげた多様な学習者向けの教材はほぼ出版済み、もしくは出版が予定されている。辞書としてセルバンテス協会との共同出版である *Diccionario de términos clave de ELE* も刊行され、EnClave ELE の辞書同様、近年の ELE 教育研究に必携の書と言えよう。

近年、日本でもスペインから派遣したコーディネーターによる ELE 教育をテーマとしたワークショップを開催し、日本の ELE 教育関係者にとって貴重な勉強の機会を提供している。特に、それまでワークショップという活動形態そのものになじみが薄かった大半のノンネイティブ日本人教師にとってこのような活動やその意義を認知させた功績は大きいと筆者は思う。

読解教材でも MCER 準拠の *Literatura hispánica de fácil lectura* シリーズを刊行している。なお、読解教材はなぜか MCER 以後も共通参照レベル別を明記したテキストがあまり登場していない分野であり、他に MCER 準拠を明確に打ち出しているのは Difusión の *Aventura Joven* シリーズや *Pepa Villa, Taxista en Barcelona* シリ

一ズぐらいである。それ以外の読解教材は従来通りの使用語彙数別に難易度を分けたスタイルを維持している。読解テキストの編纂は文章の難易度に気を配ると同時に物語の内容をも考慮する必要があるが、その上でさらに MCER や PCIC に忠実に準拠した文章を練るといのは想像する以上に難しいことなのかもしれない。

ELE教師向けウェブページは <http://www.sgel.es/ediciones/> である。

2.2.8. SM

ELE 総合テキスト *Nuevo ELE* シリーズや *Amigos* シリーズ、タスクアプローチによる *Redes* シリーズなどが若年層から成人向けの総合テキストである。その他、成人向けの *Protagonistas*、移民の子弟向けテキスト *Horizontes* を刊行している。

また、特定言語母語話者向けの *Claves de Español para Hablantes de...* シリーズには日本人向けのテキストも刊行されている。

全般的には総合テキストよりも補助教材や辞書類のラインナップが充実している印象を受ける。例としては補助教材の *Gramáticas de uso del español* シリーズや *Prácticos ELE* シリーズなど。また *Centro Virtual Cervantes* のコンテンツである *DidactiRed* から選りすぐったシリーズは実践的で、アクティビティ考案のヒントが豊富である。このような授業アイデア集は出版社他 ELE 教育関係のサイトにも見られる。

ウェブページは <http://www.sm-ele.com/> である。セルバンテス協会賛同のサイト *Hola, ¿qué tal?* (<http://www.holaquetal.com/web/hqt/home>)には有料で学習教材が利用でき、オンライン学習が可能である。

3. 終わりに

以上、2.2.においてスペインで ELE 教育教材を出版している主要な出版社の出版物の一部を紹介しつつ、近年のスペインの ELE 教育出版物の特徴や ELE 教育界の現状にも触れた。上述の出版社はいずれも各項目でその URL アドレスを引用したように、コンテンツが豊富で趣向を凝らしたウェブページを開設していて、自社出版物の広告宣伝を実施している他、ELE教育者向けの情報提供や告知、授業で利用可能な教材(特に各社の特定の出版物の補助教材として利用可能なもの)の提供、あるいはネット学習関連ページなど盛りだくさんである。

今回は各社のカタログや既刊の出版物を通して、MCER 以後のスペインの ELE 教育事情について概観するのが目的であるため、ネットを利用したスペイン語教育や学習についての近年のスペイン ELE 教育界の取り組みについては稿を改めて取り扱うこととしたい。スペイン王立言語アカデミアやセルバンテス協会が充実したウェブページを持っていることでわかるように、スペイン語普及活動にとってネットは非常に有益でかつ重要な役割を果たしうることをアカデミアやセルバンテス協会は十分に理解していると思われる。

スペインの ELE 教育教材出版社は ELE 教育関係者にアドバイスし、リードしているという筆者の感想を先に述べた。スペイン国内で開催された ELE 教育関係学会の国際大会にこれまで数度参加しているが、教材出版社は自社出版物 PR のために特設されたブースで来場者向けの宣伝活動を行うところは日本の学会での風景と同

じであった。しかし、各社のコーディネーターが新刊教材についてプレゼンテーションを実施する場が学会プログラムに組み込まれていたり、学会発表者の一人としてコーディネーター自身がワークショップを主宰するというようなことは、日本の学会ではお目にかからない光景であった。このような活動を行う各社のコーディネーターの水準の高さをあらためて実感できたのも在外研究中の得難い体験であったと思う。

以上は筆者の在外研究成果報告のごく一部であり、今後ますます変化するスペインの ELE 教育事情については、また別の機会に異なる観点からの報告をおこないたい。

(本報告の中で言及した出版物の詳細については、各社紹介の項で引用した URL アドレスに置かれている各社のウェブページを参照のこと。デジタルカタログがダウンロード可能なページもある)